

# 中国の高等教育機関日本語専攻における 入学から転出に至る経緯

—— 消極的な理由による入学者・転出者に注目して ——

## The Process from Admission to Transfer in Chinese Higher Education Institutions' Japanese Major Programs: Focusing on Students Who Enter and Transfer for Passive Reasons

魯 波\*

LU Bo

(要旨)

近年、中国の高等教育機関においては、「専攻転出」が増加している。こうした「専攻転出」者に対する研究は、主に「専攻転出」要因が分析されてきたが、「専攻転出」の決断に至るまでに、どのようなプロセスがあったのかという点についての研究は、管見のかぎり見られない。本稿は、「専攻転出」者の中で消極的な理由で入学時の専攻を決め、消極的な理由で「専攻転出」を決めた学生に注目し、「専攻転出」に至る意識が形成されるプロセスの解明を目的とした。具体的には、中国河北省の大学で日本語を専攻する学生4名を対象とし、転出にいたるプロセスをSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて分析を行った。その結果、専攻選択時には「曖昧な選択」「専攻内容への関心の欠如・喪失」「受験科目による選択範囲の制限」といった要因が確認され、在籍中には、「学習能力の欠如」や「同調心理の影響」といった消極的要因が見られた。「専攻転出」意識の形成はこれらの要因が単独で働いたのではなく、複数の消極的要因が重なり合って作用した結果であった。消極的要因による「専攻転出」を捉えることで、中国の高等教育、専攻教育には1) 学生に対する進学志望指導の不足、2) 大学の選抜制度の単一性、3) 専攻教育課程と学生の能力との不一致という三つの課題が浮き彫りになった。本稿では、これらの課題を踏まえ、今後の日本語専攻での教育に対する改善策も提言した。

キーワード：「専攻転出」、消極的な理由、プロセス、高等教育、SCAT

### 1. 背景と目的

近年、中国の高等教育機関においては、「専攻転出」が増加している（孫，2005；刘桂琪，2008）。「専攻転出」とは、同一高等教育機関内での在籍を続けつつ、入学時の専攻から他専攻に転籍することを意味する。この制度は、「学生の学問的な志向を育て、潜在能力や特技を発揮させる」（钟，2017，p.10）という目的のもとに、2005年に導入され、拡大しつつある。『全国普通高校本科教育教学质量发展报告（2022-2023年度）』（本书编委会，2024）によると「専攻転出」者数は2022年に22万人を超え、学部在籍学生全体の1.2%に相当する。

---

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

日本語専攻からの「専攻転出」も、しばしば見られる。日本語専攻からの転出だけを対象とした中国全域での人数調査は管見の限り存在しないが、筆者がフィールドとしている河北省の四大学において、日本語科在学者数に占める「専攻転出」者の割合は、2024年の時点で3.07%となっており<sup>1</sup>、これは上述の全国・全学科平均1.2%の2.5倍以上に当たる。

こうした「専攻転出」者に対する研究は、これまで、主として、なぜ「専攻転出」したのか、という要因が分析されてきた。しかし、いつの時点で、どのようにしてその「専攻転出」にいたる意識が生まれ、最終的な決断に至るまで、どのようなプロセスがあったのかという点についての研究は、管見のかぎり見られない。

本稿が目指すのは、こうした意識の形成過程である。なかでも、消極的な理由で入学時の専攻を決め、消極的な理由で「専攻転出」を決めた学生に注目し<sup>2</sup>、「専攻転出」に至る意識が形成されるプロセスの解明を目的とする。

というのも、「専攻転出」の動機となるのは、钟（2017）のねらいの通り、「学問的な志向を育て」（p.10）たり、「潜在能力や特技を発揮させる」（p.10）ために他専攻で学びたいといった積極的なものに限定されるわけではないはずであるからだ。入学した専攻での人間関係において心理的葛藤が生じたり成績がふるわなかったりといった、その場（専攻）を離れたいという理由も十分に考えられる。本稿では、これを消極的理由による「専攻転出」と捉える。そして、高等教育や専攻教育における課題を浮き彫りにするといった観点から重要な意味を持つものと考え、研究対象とする。なお、どちらにもまたがるものとして、就職時の有利不利といった実利的な理由も、「専攻転出」の決断には大きな影響があることが想定される。むしろ、「専攻転出」時の理由は、必ずしもがひとつに限定されるということはなく、複数をあわせ持つ場合もある。

## 2. 先行研究

「専攻転出」にいたる意識の形成プロセスを解明するために、本稿は中国の高等教育機関における「専攻転出」制度の変遷を追ったうえで（2.1）、先行研究で取り上げられた「専攻転出」の要因を、学習者の経験する時間的順序に従って、「専攻選択時・在籍時転出の共通要因」「専攻選択時のみに見られる要因」「在籍時のみに見られる要因」に分けて整理する（2.2）。そのうえで、本稿の位置づけについて明確に述べる（2.3）。

### 2.1 「専攻転出」に関わる諸制度の変遷

「現代社会・経済・科学技術・文化および教育の発展動向に対応」し、「社会主義現代化建設の需要に適応する」とともに、「21世紀の要請に応じた高度専門人材を育成する」ため、1995年、中国教育部（文部科学省）は、『高等教育面向21世紀教育内容和课程体系改革计划』<sup>3</sup>（高等教育機関21世紀に向けての教育内容とカリキュラム改革計画：以下『改革計画』）を発表した。『改革計画』（p.1）には、21世紀の社会に求められる人材の育成について、以下のように記されている。

未来社会における人材の知識、能力、素質の構造に対する要求を研究し、教育の理念を転換し、教育観念を刷新し、人材育成のモデルを改革する（拙訳）。

楊 (2006) によれば、『改革計画』の実施により、中国の高等教育は従来のスペシャリスト養成から、個人の能力に応じた多様なゼネラリスト養成へと変換したという。

また、1998年に中国教育部によって発表された『关于深化改革教育，培养适应21世纪需要的高质量人才的意见』<sup>4</sup>（教育改革の深化，21世紀に対応する質の高い人材育成に関する意見）は、教育観念の更新，専門教育幅の拡大，教育内容・教授法の改革，教養教育の強化を中心とし、高等教育改革の具体的内容を方向づけた。翌1999年には中国政府は『中共中央国务院关于深化教育改革全面推进素质教育的决定』<sup>5</sup>（中国共産党中央委員会国務院教育改革の深化に関して教養教育全面推进に関する決定）を公布し、全教育機関において、全面的に教養教育を推進するという方針を打ち出した。したがって、同時に行われた高等教育機関の構造調整は、大学間の合併を通して、学科間のつながりを補完しつつ大学の総合性を強化するという方向性を持つこととなった（楊，2006）。つまりは、多学科を持つ総合大学や多科大学が、現在の高等教育システムの中で重要な位置を占めるようになったのである。これらの多科大学や総合大学においては、学際的な学科だけでなく、多分野を融合した教養教育科目を開設できるようになったためだ。より多くの教養教育科目の設置は、「大類募集，専攻分流」および「専攻転出」を実施していく条件を整えた。

「大類募集，専攻分流」とは、学生が入学前には専攻を決めず、各高等教育機関に決められた学問分野に入り（大類）、一年間ないし二年間の教養教育を受け、その後、自分に相応しい専攻を選ぶ（分流）という制度であるが、「専攻転出」は、入学時に所属決定された専攻から同一学校の別の専攻に転換することである。「大類募集，専攻分流」は、1998年に教育部によって策定された『面向21世纪教育振兴行动计划』<sup>6</sup>（21世紀に向かう教育振興行動計画）によって大幅に増えた大学入学者にうまく対処していくための方策でもあった。

その後、中国教育部は2005年に『普通高等学校学生管理规定』<sup>7</sup>を改変し、「専攻転出」の条件を各高等教育機関の規定に従うものとした。その規定以降、学生は自身で転出の申請をすることが可能になった。申請された学校側は、学内規定に基づいて学生の転出可否を判断するのである。これは改変前の規定（中国教育部1990年に設定）<sup>8</sup>に定められていた3条件（①才能があり、「専攻転出」は才能を活かすために役に立てることができる者、②病や身体欠陥のある者、③専攻学習に障害のある者）のうちいずれかを満たさなければならないという条件と比較すれば、大幅な緩和といえる。

中国の高等教育改革は、専門教育だけでなく、専門教育と教養教育の両立を重視する方向へと進展し、多くの教養教育科目の開設が「大類募集，専攻分流」および「専攻転出」の実施に向けた基盤を築いた。「普通高等学校学生管理规定」の修正は、学生が自分の興味や能力に応じて専門分野を選択・変更できる環境を整え、教育の質の向上と学生の多様な成長を促進しようとしている。

## 2.2 「専攻転出」要因に関する研究

先行研究で取り上げられた「専攻転出」の要因を、学習者の経験する時間的順序に従い、「専攻選択時・在籍時転出の共通要因」、「専攻選択時のみに見られる要因」、「在籍時のみに見られる

要因」としてまとめる。「専攻転出」原因には「積極」的な要因、「消極」的な要因、どちらでもない／どちらとも言える要因が挙げられる。

### 2.2.1 専攻選択時・在籍時の共通要因

専攻選択の「曖昧さ」：入学前の専攻選択時における圧倒的な情報不足が「専攻転出」の潜在的な要因であるという主張はすでに、多数の先行研究（沈・陳2003；陳・朱，2005；黄伟达，2005；刘・肖，2006；刘桂琪，2008；陳・李・张，2009；李，2009；刘娟，2010；张・王，2017；黄俊利，2018；罗・张・李，2023）によって繰り返されている。このうち、沈・陳（2003）や陳・朱（2005）は、専攻選択時における圧倒的な情報不足の状況を中国語で「盲目性」と表現している。中国語で「盲目性」とは一般に「认识不清；考虑不慎重；目标不明确（拙訳：物事に対する認識が不十分であったり、判断・選択が軽率であったり、目標や方向性が定まっていない状態を指す。）」（中国社会科学院语言研究所词典编辑室，2014，p.873）を示し、したがって、先行研究に指摘される「盲目性」は、専攻から求められる能力や条件、カリキュラムの内容、専攻における教育の質や学術レベルなどについて、学生が、十分に情報が得られていないことを指す。あわせて、学生が人気のある専攻に憧れ、自身の適性を考慮せず漠然と選択するということも表している。李（2009），罗・张・李（2023）は、この「盲目性」（曖昧さ）とは、専攻に対する単なる理解不足にとどまらず、学生が自らの能力、特技、興味について正確に認識していないという点も含まれていることを指摘している。こうした認識不足のため、学生は自分に適した専攻を選ぶことができず（黄俊利，2018），その結果、「まずは入学し、その後に専攻を調整する」（张・王，2017，p.117）という考えを持つ学生が増加している。このような状態は大学入学前の専攻選択時だけでなく、「専攻転出」時の転出先を選択する際にも見られ（黄伟达，（2005）；刘・肖，（2006），刘娟（2010）によれば、これは、「専攻転出」の主因の一つである。

専攻内容への関心の欠如/喪失：多くの研究が、専攻への関心の欠如/喪失を大学生の「専攻転出」を決定する主要な要因として挙げている（胡，2004；孙，2005；Stanek，2005；刘・熊，2008；王有才，2011；苏・张・周・林，2016；黄俊利，2018）。

大学入試の成績が思わしくなかったため、専攻内容に関心がなくとも低得点で入学可能な専攻を選択した場合、入学後に転出の必要をより強く感じることもある（胡，2004；刘・熊，2008；王有才，2011）。このように、専攻での学習・教授内容に対して、もともと関心が欠如していたという場合だけではなく、入学時には関心を有していても、その後、その関心を喪失するという場合も見受けられる。在籍中の専攻に対する興味の喪失について、Stanek（2005）は、学生が元の専攻に対する興味が失い、その専攻分野で成功する可能性がないと認識することが、「専攻転出」の原因であると述べている。この見解は、黄伟达（2005）の研究とも一致しているが、黄はさらに学生の専攻に対する興味が、カリキュラム、教員の授業の効果、教育環境、さらには専門職の就職見通しなど、さまざまな要因によって影響されると指摘している。沈・陳（2003）や黄俊利（2018）は、入学後に学生が一定の学習を経て、専攻に対する興味が薄れ、その専攻が自分に適していないことに気づく場合について論じている。また、孙（2005），苏・张・周・林（2016），张・王（2017）も、専攻に対する認識不足や学習に対する消極的な態度が、「専攻転出」の意識を生じさせる要因であると指摘している。

他者による過度の介入：専攻選択において、身の回りの人の介入が学習者の「専攻転出」の一因になる。沈・陈（2003）と陈・朱（2005）によれば、学生は専攻の選択において親や教師の意見や指導を受け入れることが多いが、黄伟达（2005）、李（2009）は、これらの介入は入学後の「専攻転出」に繋がっていると強調した。同じ文脈で、孙（2005）、王月红（2012）、苏・张・周・林（2016）、黄俊利（2018）、王娟（2019）は、過度な介入は、子どもの興味や特技を無視し、「専攻転出」の主要な要因であると主張している。さらに、刘・肖（2006）と刘娟（2010）は親の学歴が高いほど、子どもへの干渉が増え、「専攻転出」の意向が強まる傾向があることを示した。

### 2.2.2 専攻選択時のみに見られる要因

合格した専攻の志願表中での順位：専攻志望の記入において、受験生は一般的に自身の好みや目標を基に志望順位を付ける。第一志望は受験生が最も希望する大学及び専攻を示すものである。第一志望の学校に合格しなかった場合には、次に第二志望、第三志望等の選考過程に進むこととなる。黄伟达（2005）、罗・张・李（2023）、刘・肖（2006）、刘娟（2010）は合格専攻の志願表における順位が「専攻転出」に顕著な関係があると主張している。そのうち、黄伟达（2005）はアモイ大学の「専攻転出」に関する調査において、上位の志望専攻に合格しなかった場合、31.6%の学生が入学後に上位の志望専攻への転出を希望していることを明らかにしている。また、刘・肖（2006）および刘娟（2010）は、志願専攻に合格した場合、志願表でその専攻の位置が前方にあるほど、「専攻転出」を希望する学生は少なく、逆に後方に位置する専攻の場合は、転出を希望する学生が多くなる傾向があることを指摘している。その後の苏・张・周・林（2016）による研究もこれらの見解を裏付けている。

### 2.2.3 在籍時のみに見られる要因

学習能力の欠如：学習能力は専攻での学習において重要な要素であり、高い学習能力を持つ学生は専門知識の習得が速く、学業成績も向上する。逆に、学習能力が低いと専門的な内容の理解に困難が生じ、学習成果に悪影響を及ぼし、「専攻転出」を考える可能性が高くなる。

学習能力に関して、孙（2005）、刘桂琪（2008）、吴（2010）は、多くの学問分野が一定の基礎を必要とし、特に情報科学専攻では数学の基礎や個人の思考能力が学習において重要な役割を果たすと述べている。李（2009）は、学習能力や興味と専攻からの要求が一致しない場合、学習効果が得られず、学習の自主性や能動性が学習のプレッシャーによって失われることから、「専攻転出」の可能性が高まると主張している。この点について、Ibarra-Salazar（2008）は、学習能力が高く成績の良い学生は「専攻転出」の可能性が低いことを示した。その後、黄俊利（2018）は、学習能力が元の専攻の学習に対応できない場合、「専攻転出」の傾向が高くなると主張している。これらの研究から、学習能力が「専攻転出」の決定に重要な影響を及ぼすことが明らかとなった。

専攻への満足度と適応度の低下：専攻への満足度に関する先行研究では、黄伟达（2005）は、在籍中の専攻に対する満足度が大学生の「専攻転出」の有無を決定づける主要な要因であることを指摘している。このことは、専攻満足度が「専攻転出」意向に強い影響を与えることを示唆している。さらに、刘・肖（2006）および刘娟（2010）の研究によると、専攻満足度と「専攻転出」

の意向には負の相関関係があり、満足度が高いほど「専攻転出」の意向は低く、逆に満足度が低いほど「専攻転出」の意向が高くなることが示されている。李（2009）、王有才（2011）、Moon et al.（2013）などの研究は、学生が専攻に対して不満を抱くことが転出の主要な要因であることを明示している。李（2009）は、専攻に対する不満の原因として、次の三点を挙げている。第一に、専門科目が時代遅れであり、教育課程が不合理であること、第二に、教授法やカリキュラム設計が不十分であること、第三に、教育環境が不適切であること。李（2009）によれば、これらの要因が学生の専攻に対する不満を引き起こし、結果として「専攻転出」の意向を強める要因となることが示されている。

専攻への適応度に関する研究としては、刘・肖（2006）は、学生は大学入学後に、周囲の環境や学習内容に適応するために一定の時間を要することを示している。早期に適応できた学生は学習意欲が高まり、その学習意欲が専攻満足度の向上に寄与するという。また、刘娟（2010）は、専攻への適応性が高い学生ほど「専攻転出」の意向が低く、逆に専攻への適応性が低い学生ほど「専攻転出」の意向が高いことを強調している。これにより、専攻適応度が「専攻転出」の意向に強い影響を与えることが明らかになり、適応が困難な学生は「専攻転出」を希望する傾向が強いことが理解できる。

同調心理の影響：刘桂琪（2008）は、「専攻転出」に対する明確な動機なしに、先輩からの影響を受けて転出した学生も存在することを指摘している。この影響により、新入生は自らの専攻を客観的に評価する能力が妨げられ、その結果として転出を検討する動機が生じることがある（黄俊利，2018）。周囲の人が「専攻転出」することで、自分も同様に「専攻転出」を試みようとする学生がしばしば見られる。刘・熊（2008）は、この現象について、社会心理学的観点から同調心理によるものであると判断している。同調心理の形成原因としては、①他人が専攻を転出するのを見て、自分の専攻が不十分だと感じるようになる（蔡・周，2020）、②精神的にバランスを崩してる状態が影響していることがある（张・王，2017）という2点が挙げられている。王娟（2019）によれば、このような心理状況は、一時的な衝動に過ぎないが、一方、黄俊利（2018）は、こうした理由で専攻を転出する学生の割合は高くないものの、学生個人、学校の発展、さらには人材育成の観点からも、このような「専攻転出」は無視できない重要な現象であると指摘している。

### 2.3 本稿の位置づけ

学生の転出決断に至るプロセスをよりよく理解するため、本稿は便宜的に専攻選択から「専攻転出」に至るまでの経路を四つに分ける。

表1 「専攻転出」ルート想定図（筆者作成）

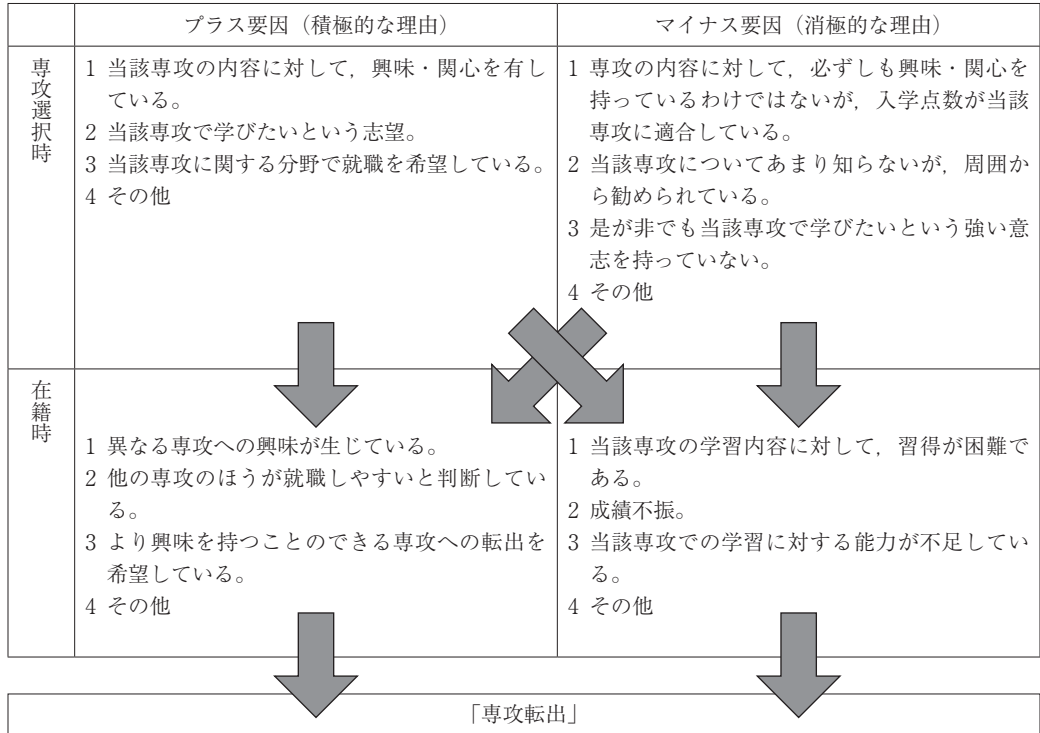


表1は「専攻転出」者の入学から「専攻転出」までの流れである。学生は積極的あるいは消極的な理由によって、専攻に入学する。入学後の専攻での学習中に、積極的な理由あるいは消極的な理由で、他専攻に転出する。これを「専攻転出」者の入学前、学習中の状況によって分けたものが、下記の1～4)である。

- 1) 積極的な理由で入学—積極的な理由で—「専攻転出」
- 2) 積極的な理由で入学—消極的な理由で—「専攻転出」
- 3) 消極的な理由で入学—積極的な理由で—「専攻転出」
- 4) 消極的な理由で入学—消極的な理由で—「専攻転出」

本稿は4)の転出者に焦点を当てる。4)に注目するのは、4)の転出者に注目することによってこそ、現在の高等教育や専攻教育に内在する問題が浮き彫りになると思われるからである。問題を明確にすることによって初めて、入学前・専攻在学中の学生の支援について、より具体的に考えることができるようになる。消極的な理由<sup>9)</sup>の入学者が消極的な理由で転出に至るまでにどんな経験をしてきたのか、また、入学前に学習者が抱える消極的な理由は学習中に生じる転出に至る消極的な理由とどのようなつながりがあるかを明らかにする必要がある。

## 4. 調査

研究データを収集するため、2024年5月下旬から6月上旬にかけて、中国河北省の4つの大学に所属する日本語学科「専攻転出」者19名（男性5名、女性14名）に対し、半構造化インタビューを実施した。この19名は、この4大学での日本語学科からの転出者全体の86.36%を占めている。インタビューは、協力者の日本語能力が初級程度であったため、中国語で行い、録音データの総時間は約19時間半となった。なお、調査者および協力者にとって、中国語は母語である。

インタビュー調査協力者19名の録音データを分析したうえ、うち4名を消極的な理由で入学し、消極的な理由で転出した学生であると認め、本稿の分析対象とした。李明さん、王紅さんは同一の大学に所属している（以下、協力者の名前はすべて仮名である）。李明さんは男性で、学内の日本文化体験室において51分間のインタビューを実施した。王紅さんは女性で、学内の教室において57分間のインタビューを実施した。趙雲さん、劉強さんも同一の大学に所属している。この大学は李明さん、王紅さんの所属する大学とは異なる。協力者都合による時間の制限があったため、グループで大学の会議室において、1時間27分にわたって実施した。インタビューの実施詳細は表2に示した通りである。

表2 インタビューの実施の詳細（筆者作成）

協力者（仮名）	性別	調査日	インタビュー実施場所	録音時間
李明	男性	2024. 5. 28	日本文化体験室（学内）	51. 02
王紅	女性	2024. 5. 27	教室（学内）	57. 22
趙雲，劉強 （共同）	女性 男性	2024. 5. 31	会議室（学内）	1. 26. 59

なお、本研究は研究協力者・研究協力機関へ十分な倫理的配慮を心がけた。インタビューの実施にあたっては、まず「専攻転出」者が所属する大学の日本語学科に連絡を取り、研究の趣旨を口頭で詳しく説明した上で、インタビュー募集への協力を依頼した。その後、日本語学科の責任者および教員を通じてインタビュー協力者を募集した。インタビューの際にも、十分に口頭および書面で研究の趣旨を説明したうえで、書面での同意を得た。また、収集したデータは、研究発表の目的以外には使用せず、個人情報には厳格に管理することに注意を払った。以上すべての手順について、調査者の所属する大学で、事前に調査の倫理的な側面の配慮について審査を受け、問題のないものとして認められた。

## 4. 分析手法

本稿は、分析方法として、SCAT (Steps for Coding And Theorization) (大谷, 2007) を採用した。SCATを用いる理由は二つある。一つは、学生の入学動機、学習目的、学習への認識、就職観などが多様化する中で、「専攻転出」の原因も多様化しているという点である。この「多様性」は学生の家庭環境、経歴、自己認識、他者の影響などといった「個別性」が複雑に相互作用しながら形成されている。転出者の「多様性」・「個別性」を明らかにするためには、質的研究法を採用することが適切である。質的研究の中で、SCATデータ分析手法は明示的で定式的な手続きを有するため、初学者にとって着手しやすい分析法であるとされている(大谷, 2019)が、これは筆者にとっても同様であった。もう一つは、SCATは比較的小さな質的データの分析に有効とされており(大谷, 2007)、4名という小規模なデータを扱う本稿に適していると考えられるからである。

SCATでは、はじめに録音データを逐語録に起こし、セグメント化する。1) データの中の注目すべき語句を書き出す。2) それを言い換える語句を考案する。3) それを説明するための概念、語句を案出する。4) そこから浮上するテーマ・構成概念の順にコードを考案していく。以上の手順によって、ストーリー・ラインと理論記述、追究すべき課題を作成する。このような手順によって作成された表の1部を表3に示す。本稿では、インタビューは中国語で実施されたため、逐語録および1) については、中国語で行い、その後日本語訳を付した。

表3 李明さんの語り (一部) (筆者作成)

<p>発話者番号</p>	<p>3</p>	<p>テキスト</p>	<p>&lt;1&gt; テクスト中の注目すべき語句</p>	<p>&lt;2&gt; テキストの言い換え</p>	<p>&lt;3&gt; 左を説明するよ うなテクスト外 の概念</p>	<p>&lt;4&gt; テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考 慮して)</p>
<p>3</p>	<p>当時被日语专业录取之后, 就想我也没有基础, 会跟不上, 然后我就问了我身边学日语的朋友。 (その時, 日本語専攻に合格した後で, 日本語に慣れることは全然知りませんでしたから, ついていけるかなって思ってたんです。それで, 周りの日本語を勉強している友達に聞いてみました。)</p>	<p>没有基础/不会跟不上/问了身边学日语的朋友 (日本語に関することは全然知りませんでした。周りの日本語を勉強している友達に聞いてみました。)</p>	<p>未経験者/初心者/ゼロベースの学習者/不安/心配/憂慮/確認</p>	<p>よさ 左を説明するよ うなテクスト外 の概念</p>	<p>未知なもの/接触のなさ による不安の発生</p>	
<p>5</p>	<p>第一个是汉语言文学, 我们本地的大学, 因为我怕我够不上人家的分数线, 然后报了一个园林, 还有历史, 日语后面还有经济管理, 物流管理之类的专业。 (専攻選択について, 最初に選んだのは中国語文学で, 地元のを考えていました。でも, 自分の点数が足りないかもしれないと思って, 造園とか歴史, 日本語などの専攻を入れました。そのあと, 経済管理とか物流管理などの専攻も加えました。)</p>	<p>第一汉语言文学/然后报了一个园林 还有历史/日语后面还有经济管理, 物流管理之类的专业。 (最初に選んだのは中国語文学です/造園とか歴史, 日本語などの専攻を入れました。経済管理とか物流管理などの専攻も加えました。)</p>	<p>上位専攻/入りたいたい専攻/入りたくない専攻/候補専攻/希望専攻/志向専攻</p>	<p>就職率・就職観から逆算される専攻の人気度/専攻選択に対する強い意志の欠如</p>	<p>日本語科という上位選択 /是非でも学びたい事柄</p>	
<p>7</p>	<p>家人对这个事儿不是特别有意见, 我觉得就行。他们不太懂我考志愿, 因为我是独生子, 爸妈也没有经验。我的态度就是只要能够上一个大学或者可以学到自己比较感兴趣的专业就行。 (家族はこのことについて特に意見があるわけではなく, 私がいいと思えばそれでもいいという感じ。両親は志望校や志望学科の選択に詳しくなく, 私は一人っ子なので, 両親も経験がありません。私の態度としては, とにかく大学に進学できればいい, または自分が興味を持てる専攻を学べればそれです。)</p>	<p>我觉得就行/不太懂我考志愿/独生子/只要能上一个大学或感兴趣的专业 (私がいいと思えばそれでもいい/両親は志望校や志望学科の選択に詳しくない/私は一人っ子なので, 両親も経験がありません。進学できればいい, または自分が興味を持てる専攻を学べればそれです。)</p>	<p>本人の意思/自己判断/自分の好み/自由/不明/不了解/知識外/一人っ子時代/少子化/四年制大学/学歴/興味のある専攻/志向専攻</p>	<p>両親に関わることを可能にする知識と体験の欠如/家庭内での具体的かつ身近なモデルの不在/学歴社会に応じる高等教育の大衆化</p>	<p>助言者としての両親の無力化/消極的な理由による決定の委譲と受託/高等教育機関への進学希望</p>	
<p>15</p>	<p>日语是从基础开始学, 我觉得还可以, 也能接受。(中略) 两三个月后, 可能平时不是那么特别用功, 再加上没有基础, 觉得也学不会, 然后慢慢不喜欢, 没有那么多兴趣去学习。 (最初は日本語を基礎から勉強し始めて, まあまあできるし, 大丈夫だと思っただけです。(中略) しかし, 2~3ヶ月後には, 日本語はあまり熱心に勉強しなかつたことに加え, もともと基礎がなかつたため, 次第に難しく感じるようになり, 最終的にはあまり好きではなくなり, 興味も薄れてしまいました。)</p>	<p>我觉得还可以/两三个月后/不是特别用功/觉得也学不会/没有那么多兴趣去学习 (まあまあできるし, 大丈夫だと思っただけです/2~3ヶ月後/熱心に勉強しなかつたことに加え, もともと基礎がなかつたため, 次第に難しく感じるようになり, 最終的にはあまり好きではなくなり, 興味も薄れてしまいました。)</p>	<p>受け入れ/順調/好調/授業の従い/教師の指示の通り/勉強の怠り/反省/無関心/変化/興味の失い/意欲減退</p>	<p>外国語としての日本語/学習の決まり文句/大学入学後短期間の専攻学習の順調期/勉強不足による興味の消失</p>	<p>専攻学習での分岐点</p>	

## 5. 分析結果と考察

本稿で分析対象とした4名は、その全員が専攻選択において意志が曖昧だったという点で共通する。大学に進学すること自体を目的としていた李明さんには、「是が非でも学びたい事柄」は特に存在していなかった。また、日本語専攻に対しては、「未知なもの」とであると認識し、具体的な理解や関心を持ってはいなかった。王紅さんは「専攻より家族の経済状況を優先する考え方」を持ち、外国語専攻について十分に理解しておらず、特に好きか嫌いかということについて意識していなかった。趙雲さんは自分の興味や志望をあまり考慮せず、「志望専攻ではなく志望校が優先という進学志向」に基づいて志望大学を決定し、その中で専攻を選択した。劉強さんは高校時代に英語学習に大きく遅れを感じていたものの、自身の志望専攻のカリキュラムや学習内容を十分に確認することなく選択していた。以上のことから、分析対象とした4名はいずれも、専攻選択に対する十分な理解を欠いたまま専攻を決定していたことが明らかとなり、専攻選択には一定の「曖昧さ」が存在していることがわかった。

また、李明さん・王紅さん・趙雲さんの3名は大学入学点数（大学入試統一試験「高考」での点数）が思わしくなかったため、大学に合格することを優先し、好きな専攻ではなく、自身の点数に見合う範囲で、入学可能な専攻を選択していた。この点で、胡（2004）、刘・熊（2008）、王有才（2011）、张・王（2017）の先行研究が指摘した専攻内容への関心の欠如が見られるということになる。一方、日本語で大学入学試験を受験したことで、選択可能な専攻が限定されていた劉強さんの日本語専攻の選択は、やむを得ない結果であった。劉強さんのパターンは、本稿では「受験科目による専攻選択範囲の制限」と名付ける。

在学中、李明さん・王紅さん・劉強さんの3名は、いずれも「学習能力の欠如」という課題を抱えていた。その結果、専攻学習において成績不振に直面し、現状を改善しようと積極的に様々な方法を試みたものの、目標達成には至らず、最終的には専攻学習を続ける自信を失うに至った。一方、趙雲さんは、進路に関する葛藤を抱え、仲間からの助言を受けて「専攻転出」を考え始め、さらにルームメイトの影響を受けることで、その意欲が強化された。最終的には、「ルームメイトが転出するなら、自分も同様に試みよう」という同調心理が働いた結果、「専攻転出」を決断するに至った。

### 5.1 李明さんのデータ分析

ここでは、李明さんの「専攻転出」に至るプロセス（部分）を示す。専攻の選択の際、李明さんは大学進学を最も重視しており、専攻選択に対して特に強い目的意識は持っていなかった。経験者のアドバイスを受け、英語学習に困難を感じ、新しい言語に対して好奇心を抱いていたため、日本語専攻を選んだ。学習初期は順調に進んでいたものの、語彙や文法の難易度が増すにつれて徐々に苦しさを感じ、興味を失い、これが学習効果に否定的な影響を及ぼすようになった。また、授業前の予習や復習など、学習習慣が不足していたため、成績は低調で、いくつかの科目で不合格となった。指導教員は何度も面談を行い、学習の強化を勧めた。しかし、李明さんは実行力が不足しており、学習を継続することができなかった。最終的には、李明さんは成績不振により「専攻転出」を考えるようになった。分析では実際の語りのデータの中から以下のような構

成概念を抽出し、ストーリー・ラインと理論記述を作成した。李明さんのストーリー・ラインと理論記述を表4で示す。

表4 李明さんのSCAT分析におけるストーリー・ラインと理論記述（筆者作成）

ストーリー・ライン
<p>入学前、李明さんは、自身の興味や能力についての認識が不足していたため、「高等教育機関への進学希望」を持ってはいたものの、「是が非でも学びたい事柄」はなかった。専攻選択において、李明さんは、大学入学の成績不振や「両親の助言者としての無力化」などの「消極的な理由による決定権の委譲」を行い、専門家の意見に依拠した。「日本語科という選択は志願表の中で比較的上位」には入れていたものの、それまで日本語の学習経験を持たなかったため、「未知なもの」として認識され、「接触のなさによる不安の発生」をした。李明さんは、専攻選択において「曖昧」な側面があり、十分な準備をしないまま学習を開始した。</p> <p>在学中、「教育における実施側と受け手側の非対等な関係」や「通常専攻での教育において期待されるような一連の学習習慣の欠如」により、「専攻学習での分岐点」が生じ、学習意欲が減退した。これが「専攻転出」を意識した最初の段階であり、学習環境に対する不安や不満が高まる中で、「専攻内のみならず、専攻外の科目においても成績不振」に陥り、専攻を続けるべきかどうかを真剣に考え始めた。これにより、「専攻転出」の意識が次第に強くなった。その中で「劣等生であると自己認識」し、「成績不振の窮地から脱出しようという心情」を抱いたが、「三分鐘熱度（三日坊主）による、偃旗息鼓（不首尾に終わること）」の結果、学習の継続に対する自信を失った。最終的に、この不安と挫折感が積み重なり、「専攻転出」の意志を決定」するに至った。</p>
理論記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「是が非でも学びたい事柄」がなくとも、「高等教育機関への進学希望」を有する場合がある。</li> <li>● 「未知なもの」である日本語は、「接触のなさによる不安の発生」をさせる。</li> <li>● 「教育における実施側と受け手側の非対等な関係」と「通常専攻での教育において期待されるような一連の学習習慣の欠如」は、「専攻学習での分岐点」となり、学習意欲を減退させることがある。</li> <li>● 「三分鐘熱度(三日坊主)による、偃旗息鼓(不首尾に終わること)」は、「専攻転出」の意志を強めさせる。</li> </ul>

以下では、李明さんの語った内容の詳細を、考察を加えながら記述していく。

**「未知なもの」だった日本語 は「接触のなさによる不安の発生」をさせる。**

李明さん：当時被日语专业录取之后，就想我也没有基础，会不会跟不上，然后我就问了我身边学日语的朋友。（表3-3）（その時、日本語専攻に合格した後で、日本語に関することは全然知りませんでしたから、ついていけるかなって思ったんです。それで、周りの日本語を勉強している友達に聞いてみました。）（以下すべて拙訳）。

李明さんはこれからの日本語学習に対して疑念を抱き、日本語について十分に知らないと感じたことでプレッシャーを覚えている。これにより、将来の学習に不安を感じ、専攻の学習に適応できるかどうかについて自信を欠いていることがわかる。その原因について、李明さんは日本語専攻の選択において「曖昧」な側面があり、専門の学習に対する十分な知識を事前に有していなかったと考えられる。

**「是が非でも学びたい事柄」がないものの、「高等教育機関への進学希望」を持つ。**

李明さん：第一个是汉语言文学，我们本地的大学，因为我怕我够不上人家的分数线，然后报了一个园林，还有历史，日语后面还有经济管理，物流管理之类的专业。（表3-5）（専攻選

択について、最初に選んだのは中国語文学で、地元の大学を考えていました。でも、自分の点数が足りないかもしれないと思って、造園とか歴史、日本語などの専攻を入れました。そのあと、経済管理とか物流管理などの専攻も加えました。

李明さん：家人对这个事儿不是特别有意见，我觉得行就行。他们不太懂报考志愿，因为我是独生子，爸妈也没有经验。我的态度就是只要能够上一个大学或者可以学到自己比较感兴趣的专业就行。（表3-7）（家族はこのことについて特に意見があるわけではなく、私がいいと思えばそれでいいという感じです。両親は志望校や志望学科の選択に詳しくなく、私は一人っ子なので、両親も経験がありません。私の態度としては、とにかく大学に進学できればいい、または自分が興味を持てる専攻を学べればそれで十分です。）

李明さんの専門選択には、準備不足と自分の興味や能力に対する認識不足が見られる。彼は、自分の学力（成績）や合格しやすさを基準に専門を決定しており、将来の職業や専門的な関心よりも、大学に入ること自体を優先している。このような選択は、専門に対する明確な目標が欠けており、一定の「曖昧さ」を伴っていると考えられる。さらに、「とにかく大学に入ればよい」「興味があればよい」という考え方は、入学後の学習意欲やキャリア形成において不安定さや迷いを生じさせ、学習モチベーションの低下や不適応のリスクを高める可能性がある。

#### 「専攻学習での分岐点」

李明さん：日语是从基础开始学，我觉得还可以，也能接受。（中省略）两三个月后，可能平时不是那么特别用功，再加上没有基础，觉得也学不会，然后慢慢不喜欢，没有那么多兴趣去学习。（表3-15）（最初は日本語を基礎から勉強し始めて、まあまあできるし、大丈夫だと思いました。（中略）しかし、2~3ヶ月後には、日本語はあまり熱心に勉強しなかったことに加え、もともと基礎がなかったため、次第に難しく感じるようになり、最終的にはあまり好きではなくなり、興味も薄れてしまいました。）

李明さんは「日本語はあまり熱心に勉強しなかった」と述べており、これは効果的な学習方法を確立できていない、あるいは適切な学習習慣が身につけていない可能性を示唆している。さらに、日本語に関する知識が全くなく（単なる「基礎がない」状態にとどまらず）、その結果として学習に対する自信を喪失し、「日本語ができない」と感じるようになったと考えられる。これらの要因が重なり、学習の初期段階では一定の興味を持っていたものの、時間の経過とともに学習効果が思うように得られず、正のフィードバックを受けることができなかった。その結果、学習への関心が薄れ、学習意欲が徐々に低下し、最終的には学習を中断または投入を減少させるに至ったと推察される。このことから、話し手は学習過程において持続的な動機づけを欠いていたことが明らかである。

#### 「専攻学習中の挫折から生じた学習への抵抗」

李明さん：对于大学生活的好奇吧，然后对于咱们日语专业，毕竟学日语也是比较新鲜事物，

也有一种好奇心。慢慢不喜欢主要原因就是学不会，单词，语法什么的都记不住（大学生活に対する好奇心もあり，また，日本語専攻に対しても，日本語を学ぶこと自体が新しい経験であるため，好奇心を持っていました。しかし，次第に興味が薄れていった主な理由は，学習が進まないことです。単語や文法などが全く覚えられず，そのために学習が難しく感じられるようになりました。）

李明さんは，初めは好奇心に基づく積極的な学習動機によって学習を開始したと考えられるが，次第に挫折感や自己肯定感の低下，さらに認知負荷の過剰が影響を及ぼし，興味の低下や学習疲労を感じるようになったと推測される。これらの心理的反応が積み重なった結果，最終的には日本語学習に対する興味と自信の喪失に至り，日本語学習への抵抗感が生じたと考えられる。

#### 「教育における実施側と受け手側の非対等な関係」「劣等生である自己認識」

李明さん：有不会的问题的话，问同学当时能解决了，没有想去问老师。因为当时就是想自己跟同学们差距比较大了，再加上老师上完课之后，紧接着下一节课，可能有课，我就想也不用麻烦人家老师，然后自己也没有特别去想这些问题怎么解决法。（わからないことがあった場合，その時は，友達に聞いて解決できたので，先生に質問しに行こうとは思いませんでした。というのも，その時は自分と周りの友達との間に結構差があると感じていたのと，先生は授業後すぐに次の授業があることが多かったので，わざわざ先生に質問しに行くのはどうかなと思いました。それに，自分には「どうやってこの問題を解決するか」と問題解決に向かう気持がありません。）

この内容からは，教育における非対等な関係と学習者の自己認識が影響し合っていることが分かる。李明さんは，授業後に次の授業が控えている教師の忙しさを考慮し，質問することが負担になるのではないかと感じている。これにより，教師との関わりに遠慮し，疑問を解決する行動が取れなくなっている。また，李明さんが感じている劣等感も影響している。自分と友達との学力差を感じることで自己評価が低くなり，問題解決に対する意欲が消極的になる。自己認識の低さが学習に対する積極的なアプローチを妨げ，教師との関わりにも消極的になる。このように，教育現場における非対等な関係と学習者の劣等感が相互に影響し，学習行動を制限していることが分かる。

#### 「専攻内のみならず，専攻外の科目においても成績不振」

李明さん：成绩排名比较靠后，专业现在应该是79个人排70。因为上学期期末考试听力课没及格，这个学期期中考试计算机没有及格。（成績の順位は比較的低く，現在79人中70位です。前学期の期末試験で日本語聴解の授業が不合格となり，今学期の中間試験ではコンピュータの科目が不合格でした。）

李明さんは，第一学期および第二学期前半の間に，専門必修科目を含む複数の科目で不合格が続き，その結果，全体的な成績順位も低くなった。このことは，学業において大きな困難に直面

していることを示している。これらの科目の学習における行き詰まりは学習方法や学習習慣上の問題から生じている可能性がある。さらに、こうした成績不振は、心理的なプレッシャーや不安を引き起こし、その結果、自信や学習意欲に負の影響を与え、今後の専攻学習に対する不安を生じさせていると考えうる。

「三分鐘熱度（三日坊主）による、偃旗息鼓（不首尾に終わること）」の原因は「通常専攻での教育において期待されるような一連の学習習慣の欠如」である。

李明さん：当時老师说完之后肯定有一种想法，也是想好好学，但是也坚持不了两天，基本上就三分钟热度就过去了，没有等到结果，在过程中偃旗息鼓了最后也就没有深刻的变化。（その時、先生の言葉を聞いた後、確かに頑張ろうという気持ちはありましたが、結局は二日も続かず、ほとんどが三日坊主で終わってしまいました。結果を得る前に、途中であきらめてしまい、最終的には大きな変化には繋がりませんでした。）

聞き手：在学习过程当中，比如说新课的预习，上课的时候回答老师的问题，或者是在下面预习的过程当中不会的问题，上课向老师进行咨询，课下的时候来进行复习，这样一系列的环节，你在学习过程当中有没有？（学習過程の中で、例えば新しい授業の予習や、授業中に先生の質問に答えること、予習で分からなかった問題を授業後に先生に相談すること、また授業後に復習を行うことなど、一連の流れがありますが、あなたは学習の中でこれらを実践していますか。）

李明さん：基本上没有。（ほとんどありません）

会話から李明さんは学習意志が不安定であり、忍耐力や持続性に欠け、学習への主体性が低いことが明らかとなる。教師の話聞いた後、一時的に学習意欲が高まるものの、その動機は持続せず、短期間で熱意を失い、成果を得る前に学習を放棄してしまう。また、学習過程において効果的な学習習慣や体系的な計画が確立されておらず、自律性や適切な学習戦略の不足も確認できる。これらの要因が相互に作用し、学習効率の低下を招くとともに、本質的な変化の達成を困難にしていると考えられる。

## 5.2 王紅さんのデータ分析

王紅さんは大学入試で予想よりも低い成績を収め、進学先の選定は主に兄と叔母が行った。家族の勧めで、言語系（フランス語、ドイツ語、日本語）や金融・経済管理系が選択肢となり、結果的には、日本語は他の言語より多少の接触があったために選ばれた。入学前の専門知識は乏しく、英語学習と似た方法で学べると考えていたが、実際には日本語の文法や聴解、特に動詞の活用やリスニングに苦勞した。大学1年目には高校時代の恋人との遠距離恋愛による感情的な問題で精神的に落ち込み、授業を休むことが増え、成績が下がり始めた。後に復習や自主学習を試みたが、積み残した学習内容や自己肯定感の低下により改善がほとんど見られず、日本語学習への自信を失った。結果的に学習意欲が低下し、「専攻転出」を考えるようになった。「専攻転出」が可能だと知った王紅さんは、この選択肢を真剣に検討し、決意を固めた。王紅さんのストー

リー・ラインと理論記述を表5に示す。

表5 王紅さんのSCAT分析におけるストーリー・ラインと理論記述（筆者作成）

ストーリー・ライン
<p>王紅さんは大学入試の「成績不利」により、専攻の選択を「親戚に依拠」する形で決定した。もともと法学を志望していたが、「専攻より家族の経済状況を優先する考え方」を持ち、親戚の意見を優先した結果、信頼できる親戚から「志望専攻の否定」を受け、外国語専攻を選択することになった。しかし、選択した日本語専攻についての知識が乏しく、強い関心を持っていたわけでもなかったため、「強い学習意識の欠如」に陥り、これが学習への姿勢にも影響を及ぼした。</p> <p>しかし、在学中、遠距離恋愛の恋人との恋愛問題が発生し、精神的に不安定になったことで授業への集中が難しくなり、「学習意欲の低下」を引き起こした。さらに、日本語という「言語学習の難しさへの不満」が募り、「熱心でない日本語の学習」にも悪影響を及ぼし、最終的に、これが「成績低下への分かれ目」となった。成績が大きく下がるとともに、専攻を続けることへの不安が強まり、「成績の下落から「専攻転出」の意図」が生じた。その後、成績を改善しようと基礎知識の学び直しや自主学習に取り組んだが、成果はほとんど得られず、学習改善の「達成失敗による専攻学習に対して自信の喪失」に至った。学習意欲がさらに低下し、在籍中の専攻での学びを続けることが難しいと判断したことで、「専攻転出」の決意が固まった。結果として、「専攻転出」を決断した。</p>
理論記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 専攻選択は「親戚に依拠」した形で行われると、強い学習意識のない専攻が選ばれる。</li> <li>● 「学習意欲の低下」と「言語学習の難しさへの不満」は、「熱心でない日本語学習」に影響を及ぼし、「成績低下への分かれ目」となる。</li> <li>● 学習向上の「達成失敗による専攻学習の自信の喪失」は、「専攻転出」の原因となる。</li> </ul>

以下では、王紅さんの語った内容の詳細を、考察を加えながら記述していく。

### 大学入試の「成績不利」により、専攻の選択を「親戚に依拠」する。

王紅さん：高考成绩刚出来的时候，跟自己预期的差较多，当时感觉自己最多就上个三本的高校，上二本学校很悬，我那会儿又正好在北京，因为我姑姑，哥哥他们都在北京生活，我姑是高中老师，我哥他自己上大学也有填报志愿的这种经历，然后我就把填报志愿的工作差不多全部交给我哥去弄，基本上都是我哥自己翻书，查看去年的分数，给我填报的志愿。（大学入試（高考）の成績が出たとき、自分の予想よりかなり低くて、せいぜい三本（三流大学相当）の大学に行ければいいと思っていました。二本（二流大学相当）に受かるのは正直厳しいと感じていました。そのときちょうど私は北京にいて、叔母やいとこ（兄）がみんな北京に住んでいたんです。叔母は高校の先生で、兄も大学受験や志望校の出願を経験していたので、私は志望校の出願をほとんど全部、兄に任せてしまいました。兄が自分で資料を調べて、去年の各大学の合格ラインを確認して、私の代わりに志望校を決めてくれました。）

以上の内容から、王紅さんは、高考の成績が自己の予想を大きく下回ったことにより、進学の見通しに対して強い不安を抱えていたと考えられる。二本大学への進学は困難であるとの自己評価から、将来の選択肢に対する主体的な展望を持ちにくい状況にあり、進路決定に関しては消極的な態度が見られる。また、進学先の選定については、親戚（兄）に大きく依存しており、情報収集や意思決定を委ねる姿勢がうかがえる。これらの点から、王紅さんは、進路選択において一定の無力感や受動性を抱えながらも、信頼できる身近な支援者の助けを受けて対応していた状況

にあったといえる。

**専攻選択に際しては、「専攻よりも家族の経済状況を優先する考え方」を持ち、親戚から「志望専攻の否定」を受けたことで、外国語専攻を選択する。**

王紅さん：我爸妈他们也不容易，就想哪怕学一个不太好，自己不感兴趣的专业也好，是个公办的学校，学费少就行。（親も大変だったので、たとえあまり得意ではなく、興味のない専攻であっても、公立大学で学費が安ければそれでよいと思っていました。）

以上の内容からは、話し手の家庭環境において経済的な負担が大きかったことがうかがえる。そのため、本人は必ずしも専攻の内容や興味を重視せず、公立大学で学費が安いことを最優先に考えて専攻を選択していたと推測できる。この状況は、経済的制約が進路選択に影響を与え、必ずしも本人の希望や適性と一致しない専攻選択につながるケースの一例として客観的に理解できる。

王紅さん：我跟我姑她们说我想学法学，他们也包括我嫂子，她是大学老师，他们就觉得法学很不好，当律师的那种概率很小，很难，一度劝我放弃，不建议我报法学。（私は叔母たちに法学を学びたいって話したんですが、叔母や兄のお嫁さん（彼女は大学の先生）も含めて、みんな法学はあまりよくないって言って、弁護士になれる可能性は低いし、難しいから、一度はやめたほうがいいって言われて、法学を志望するのは勧められませんでした。）

以上の話から王紅さんは、家庭の経済的事情を考慮し、専攻に対する関心や適性よりも、学費の安さや大学の公立性を優先する姿勢を示している。また、進路選択にあたって法学への関心を持っていたものの、親族（大学教員を含む）からは法学の将来性や難易度に関する否定的な意見を受けたため、志望の継続を断念するよう促されていた。これらの状況から、話し手は経済的制約や周囲の意見を重視しつつ、自己の希望との間で葛藤を抱えていた様子が見えてくる。

#### 「強い学習意識の欠如」

王紅さん：我对于外语学习没有说很喜欢怎么样的，我都不太了解。日语的话最起码接触过，因为初中那段时间比较喜欢，初中那会想着以后就学日语。（外国語の勉強がすごく好きってわけでもなくて、正直あまりよく分かっていません。日本語は少なくとも中学のときにちょっと触れたことがあって、その頃は少し好きだったし、「将来は日本語を勉強しようかな」と思っていた時期もありました。）

以上の内容から王紅さんは、外国語学習への強い関心や明確な意欲を持たず、専攻内容の理解も十分ではないと考えられる。ただし、中学時代に日本語に触れ興味を持った経験があるため、他の外国語よりは親しみを感じている様子が見えてくる。したがって、王紅さんの専攻選択は、語学への積極的な動機や志向性によるものではなく、過去の経験や漠然とした親近感に基づく比較的受動的な選択であったと推察される。

「学習意欲の低下」と「言語学習の難しさへの不満」は、「熱心でない日本語学習」に影響を及ぼし、「成績低下への分かれ目」となる。

王紅さん：但是发生了一点小事儿，我失恋了。（中略）后来分开了，分开那段时间我就开始萎靡不振，我觉得是有很长一段时间，我不想上课，然后就想着逃课，上课也听不下去，一整天躺在宿舍里，要么就是哭，想各种事情，萎靡不振很消极。（でも、ちょっとしたことがあって、失恋しました。（中略）そのあと別れることになって、別れたあの時期から私は気持ちが沈んでしまって、かなり長い間、授業に出たくないと思うようになりました。授業をサボりたくなったり、出ても全然集中できなかつたりして、一日中寮で寝ていたり、泣いたり、いろいろなことを考えてしまったりして、とにかく無気力で、すごくネガティブになっていました。）

王紅さんは、恋愛関係の終わりを契機として精神的に不安定な状態に陥り、学業への意欲や集中力が著しく低下していた様子が見え始める。この時期には授業を欠席したり、感情的に落ち込んだりするなど、無気力かつ消極的な状態が続いており、心理的な負担が学業生活全般に影響を及ぼしていたことが示唆される。

王紅さん：从和他有矛盾后，成绩就是下滑，在这之前，我感觉学习状态还挺好，都能跟得上。（彼とトラブルがあってから、成績が下がり始めました。それまでは勉強の調子も良くて、授業にもちゃんとついていけていたと思います。）

王紅さんは、恋人との関係におけるトラブルと別れを契機に、学業成績に悪影響が生じたことを自覚している。それ以前は学習状況も良好で、授業についていけていたとの認識があることから、当該トラブルが精神的状態や学習意欲に直接的な影響を及ぼしたと見られる。また、話し手自身がこの出来事を、成績の低下や学習状況の悪化における転機と認識しており、当該経験が学業における明確な分水嶺となった可能性が高いと考えられる。

王紅さん：怎么说呢，刚开始也有，但是也不那么强，觉得怎么样都行，学日语也挺好，当时是这么想的，觉得学日语也可以接受，如果说我成绩一直没有问题的话，可能就不转了。我觉得失恋导致的成绩不好，有这样一个原因。（どう言えばいいか、最初は「専攻転出」したい気持ちも少しはあったけど、そんなに強くはなかったんです。どっちでもいいかなって思ってたて、日本語を勉強するのも悪くないな、まあいいか、みたいな感じでした。日本語を学ぶのも全然受け入れられるって、そのときは思っていました。もし成績がずっと問題なかったら、たぶん転出しなかったと思います。やっぱり、失恋して成績が落ちたのが、ひとつの原因だったと思います。）

王紅さんは、当初日本語専攻に対して明確な拒否感を持っていたわけではなく、ある程度受け入れる姿勢を示していたが、専攻に対する関心やこだわりはさほど強くなく、「どちらでもよい」という比較的曖昧な態度が見え始める。一方で、失恋による精神的な動揺が学業に影響を与え、

成績の低下を招いたことが、結果的に「専攻転出」を具体的に考える契機となったと認識しており、心理的要因が進路選択に及ぼす影響の一端が示されている。

王紅さん：我觉得听力不好，听不出来。我英语听力一直都不好，我觉得我外语的听力都不好，也不知道为什么。日语的语序和我们不一样，其次，还觉得语法变形很恶心，动词的变形很恶心。（自分リスニングが苦手で、うまく聞き取れないと感じています。英語のリスニングも昔から得意ではなくて、たぶん外国語全体のリスニングが苦手なんだと思います。でも、なぜなのかは自分でもよく分かりません。それに、日本語は語順が中国語と違っていて戸惑うし、文法の活用もあまり好きじゃないです。特に動詞の活用はすごく苦手です。）

王紅さんは、外国語学習に適性への不安を抱き、特にリスニングに強い苦手意識を持っている。英語に限らず外国語全般の聴解に困難を感じるが、理由を明確に説明できていない。一方、日本語の語順や文法活用にも抵抗があり、とりわけ動詞の活用を「すごく苦手」と否定的に捉えている。こうした言語構造への戸惑いや学習困難に加え、進展しないことへの不満や挫折感も見られ、語学専攻への適意欲やモチベーションの低下につながっていると考えられる。

**学習向上の「達成失敗による専攻学習の自信の喪失」は、「専攻転出」の原因となる。**

王紅さん：基础日语也感觉落了很多东西，也尝试过看单词书，背单词，通过网上找那些语法的学习视频，试着弥补，最后也不行，成效不大，已经失去信心了。（『基礎日本語』（文法・単語を主とする科目）もかなり抜けていると感じていて、単語帳を見たり単語を覚えたり、ネットで文法の勉強動画を探して補おうとしたんですが、結局うまくいかなくて、あまり効果が出ませんでした。もう自信をなくしています。）

話し手は、基礎的な語学力（主に文法や単語）に不足を感じており、自主的に単語帳やオンラインの学習動画を活用して補おうと努力しているものの、期待した成果を得られず、学習効果に対して失望感を抱いている。この達成失敗により専攻学習に対する自信をさらに喪失し、その結果、「専攻転出」への思いが一層強まったことがうかがえる。

### 5.3 趙雲さんのデータ分析

趙雲さんもまた大学入試で成績が本人の望むほどよくはなかったため、選択できる専攻の範囲に制限を受け、「経験者の意見」に依存する方法を選んだ。専攻に対する明確な志向がなかったため、まずは志望校を優先し、その後志望校の中で専攻を選ぶ形で進学を決定した。しかし、大学入学後、専攻での学習において次第に問題が生じ、「期待と現実のギャップ」を感じるようになった。進路に関する葛藤の中で、日本語学習を続けるべきか悩むようになり、仲間からの助言を受けて「専攻転出」を考え始めた。その後、ルームメイトから影響を受け、転出の意欲が強化され、最終的には同調心理により「専攻転出」を決断した。趙雲さんのストーリー・ラインと理論記述を表6で示す。

表6 趙雲さんのSCAT分析におけるストーリー・ラインと理論記述（筆者作成）

ストーリー・ライン
<p>趙雲さんは大学入試において、「成績不振による専攻選択の制限」を受けたため、「経験のある人への依拠」をするという方法を選択した。そして、専攻選択に明確な志望がない状態で、「志望専攻より志望校が優先という進学志向」に基づき、専攻選択を行った。しかし、明確な専攻志向がない状態で選択したことが、「専攻転出」の意識が芽生えるきっかけとなった。</p> <p>専攻での学習中、「期待と現実のギャップ」を感じるようになった。特に、授業の負担が想像以上に重く、単語の暗記や課題の多さに苦しむようになった。また、将来を考えた際に、「進路に関する葛藤」が生じ、日本語専攻のままでの就職の難しさを意識した。その後、「専攻転出」という考えへの支持を得るため、「助言者としての仲間に依存」することで「専攻転出」の考えがより具体的になった。高校時代からの友人は趙雲さんの専攻選択に賛成し、より適した専攻として思想政治専攻を勧めた。さらに、ルームメイトも「専攻転出」を考えており、「同室者からの影響による転出意欲の強化」が加わった。趙雲さんは、強い転出意識がなかったが、「同調心理による「専攻転出」の決定」に至り、「専攻転出」を決断した。</p>
理論記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「成績不振による専攻選択の制限」をされ、「経験のある人への依拠」をする。</li> <li>● 「志望専攻より志望校が優先という進学志向」に基づき、専攻選択を行う。</li> <li>● 「期待と現実のギャップ」と「進路に関する葛藤」は、「専攻転出」の誘因である。</li> <li>● 仲間による「専攻転出」という考えの支持」や、「同室者からの影響による転出意欲の強化」などの影響を受け、「同調心理による「専攻転出」の決定」に至った。</li> </ul>

以下では、趙雲さんの語った内容の詳細を、考察を加えながら記述していく。

「成績不振による専攻選択の制限」をされ、「経験のある人への依拠」をする。

趙雲さん：我高考成绩490多分，当时是我姐带我报志愿，她给我找个咨询老师，咨询老师说〇〇大学还可以，然后我就报了〇〇大学的相关专业，学校离我家比较近，我的分数只能报社会工作专业和日语专业啥的。（私は大学入試で490点ちょっとを取りました。志望校の出願は姉が手伝ってくれて、姉が相談した進学アドバイザーの先生が「〇〇大学はまあまあいいよ」と言ってくれたので、私は〇〇大学の関連学科を志望しました。家からも比較的近いし、私の点数では社会福祉学とか日本語学科くらいしか出願できませんでした。）

趙雲さんは、大学入試での得点が490点台と高くはなかったことから、自力での進路決定に対して不安や迷いを抱いていた様子が見える。そのため、進学に関しては姉や進学アドバイザーに頼りながら志望校を決定しており、進学先の選択には自発的な意志というよりも、周囲の助言や地理的条件、成績による制約といった外的要因が大きく影響している。以上のことから、本人の進路選択には一定の受動性が見られ、限られた選択肢の中で現実的な判断を下したと考えられる。

「志望専攻より志望校が優先という進学志向」

趙雲さん：因为我家在〇〇市，我想离家近一点，就确定了〇〇大学，只要能进〇〇大学，什么专业都可以。（私の実家は〇〇市にあるので、できるだけ家の近くの大学に行きたいと思って、〇〇大学に決めました。その大学に入れるなら、専攻はなんでもいいと思っていました。）

話し手は、「その大学に入れるなら、専攻はなんでもいい」と述べており、志望校の選択にお

いて大学自体の入学を最優先していることが明確である。これにより、専攻内容に対する関心や希望は希薄であり、専門的な志望よりも、学校の所在地や生活環境といった現実的な要因を重視して志望校を決定したと推察される。したがって、話し手の進路選択は、専攻そのものではなく、大学という環境や条件を優先する傾向が強いといえる。

「期待と現実のギャップ」と「進路に関する葛藤」は、「専攻転出」の誘因である。

趙雲さん：然后恰恰相反，作业好多，上课还提问，和学英语没什么两样，都要背单词，背句子，而且我是零基础，一开始背单词的时候很吃力，很长时间都是把精力都放在背单词和背句子上了。作业有点多，单词一周学一单元特别多背不过，特别吃力，我每周家都回不了，就要去图书馆背单词，我想回家。（でも、実際は全然違って、課題がすごく多いし、授業中に当てられることもあって、まるで英語の勉強と変わらないって感じでした。単語も文も覚えられないといけないし、しかも私はゼロからのスタートだったので、最初は単語を覚えるのがすごく大変でした。かなり長い間、単語や文を覚えることばかりにエネルギーを使っていた気がします。宿題も多くて、単語も1週間に1ユニット分あって量が多くて、全然覚えきれないし、本当にきつかったです。毎週、家に帰る余裕もなくて、図書館ですべて単語を覚えていて、「もう家に帰りたい」って思っていました。）

趙雲さんは、日本語専攻に対して当初抱いていたイメージと、実際の学習内容や負担との間に大きなギャップを感じており、その現実との乖離が学習意欲の低下や精神的な疲弊につながっている様子がうかがえる。特に、ゼロからの学習開始であったにもかかわらず、課題や語彙暗記の負担が大きく、日常生活にも支障をきたすほどのストレスを抱えていることから、専攻学習に対する後悔や不満が蓄積されている状況が示唆される。

趙雲さん：我就在查小红书，因为我不太了解我能干嘛，到教育机构当老师，考研？但是我没什么定力的人，考研也不一定能考上，到不如到毕业后直接就业，但是日语本科就业难，而且又不是师范专业。（私は小红書（中国発のSNS型ライフスタイル・ECプラットフォーム）でいろいろ調べていました。というのも、自分が将来何をすればいいのか、よく分からなかったからです。教育機関の先生になるとか、大学院に進学するとか、いろんな選択肢がありますが、私はあまり意志が強いタイプではなくて、大学院に行こうとしても本当に合格できるか分かりません。それなら、いっそのこと卒業してすぐに就職した方がいいのではないかと思います。でも、日本語専攻の学部卒での就職は難しいし、教育系の専門（師範）でもないのです、不安もあります。）

趙雲さんは、将来の方向性が定まらず、進路選択に大きな不安や迷いを抱えている。大学院進学や教育機関での就職を調べてはいるものの、自分の意志や能力に自信が持てず、前向きになれない状況にある。さらに、日本語専攻の学士課程卒業生として就職が難しいことや、師範系ではないという点も、不安を強めている要因である。このことから、自己肯定感の低さと将来への見通しの弱さが彼女の葛藤を生み、専攻への期待の薄さや精神的な負担が迷いを深めていると考え

られる。

**仲間による「専攻転出」という考えの支持」や、「同室者からの影響による転出意欲の強化」などの影響を受け、「同調心理による「専攻転出」の決定」に至った。**

趙雲さん：我一开想转专业的时候，我就询问她要不要转专业，她想让我转专业，她不理解我为什么要学日语，还不如去学思想政治专业，当个政治老师多好。高中的时候我俩都是政治课代表，都挺喜欢政治。（私が最初に専攻を変えようと思ったとき、彼女に「専攻を変えない？」と聞きました。彼女は私に専攻を変えてほしいと思っていて、なぜ私が日本語を学ぶのか理解できないと言っていました。それなら思想政治専攻を学んで、政治の先生になるほうがいいと。高校のとき、私たちは二人とも政治のクラス委員で、政治がけっこう好きでした。）

趙雲さんは「専攻転出」にあたり、強い専門的な意識や明確な興味・関心を持っているとは言い難く、むしろ周囲の意見や将来の就職可能性などの現実的な要素を重視し、他者の影響を受けやすい傾向が見られる。さらに、話し手と親友は高校時代に政治のクラス委員を務めるなど、政治に一定の関心を共有していたものの、それは話し手自身の強い専門志向や深い興味というよりは、過去の経験や人間関係に基づくものである。したがって、話し手の専攻選択は、本人の内的な興味よりも外的な社会的影響が大きく複合的に絡み合ったものであり、単純な個人的意思決定ではないと考えられる。

趙雲さん：还有一个想转专业的原因，是因为我室友也想转，他说日语可以作为一个工具，但是要作为未来的职业的话，确实缺少点东西，不想一直就学日语。应该说她受到她的影响挺大的，她想转专业，所以我也想转试试。如果没有她影响的话，我也有可能不会转专业，概率不是很大。要是与一个不想转专业的同学一个宿舍的话，我可能就不转了。（もう一つ「専攻転出」を考える理由は、私のルームメイトも「専攻転出」を考えているからです。彼女は「日本語はツールとしては使えるけれど、将来の職業にするには確かに物足りない部分がある。ずっと日本語を学び続けたくはない」と言っていました。正直なところ、彼女（ルームメイト）の影響はかなり大きく、彼女が「専攻転出」を考えているので、私も試しに専攻を転出してみようと思いました。もし彼女の影響がなければ、私も転出しなかった可能性が高いです。もし「専攻転出」を考えていない同級生と同じ寮に住んでいたら、たぶん転出しなかったでしょう。）

趙雲さんは、同室者が「専攻転出」を考えていることに強く影響され、自分も転出を意識するようになった。同室者の「日本語を将来の職業にするには物足りない」「ずっと学び続けたくはない」といった発言が、転出への意欲を高める要因となったと考えられる。本人も「彼女の影響がなければ、自分も転出しなかったかもしれない」と述べており、同室者の影響や同調心理が大きく働いていたことがうかがえる。つまり、専攻への主体的な問題意識よりも、人間関係の中の共鳴や流れに基づいた意思決定であったことが示される。

## 5.4 劉強さんのデータ分析

劉強さんは、大学入試で日本語を選んだため専攻の幅が限られ、日本語専攻への進学はやむを得ない結果だった。しかし、その選択は日本語を学びたいからではなく、大学入試での得点を上げるためだった。高校時代の英語成績は振るわなかったという。高校での日本語学習も受験対策が中心で、単語や文法は重視されたが、聴解や運用力の訓練は不足していた。大学進学に際しては知名度や合格可能性を優先し、日本語専攻も志願したが第一志望ではなかった。入学後は大学院進学か「専攻転出」を考えていたが、専攻カリキュラムには英語が必修として含まれており、英語が苦手な彼にとって大きな障害となった。英語学習に取り組んだものの成績の向上は難しく、最終的に「専攻転出」を決断するに至った。劉強さんのストーリー・ラインと理論記述を表7で示す。

表7 劉強さんのSCAT分析におけるストーリー・ラインと理論記述（筆者作成）

ストーリー・ライン
<p>劉強さんは高校時代から「英語成績不振による日本語の選択」をし、「大学入試に向けた日本語学習」を始めた。結果として、高校三年間ほとんど英語を学ばなかったため、英語力の向上が大幅に遅れた。大学入試では日本語を選択したことで、大学専攻の選択肢が限られ、「やむを得ず日本語専攻選択の決定」をすることになった。専攻に対する強い志望があったわけではなく、限られた選択肢の中での選択である。</p> <p>大学での学習を進める中で、劉強さんは進路に関する葛藤を抱えつつ、「進路計画の設定」を行い、日本語に関する大学院に進学するか「専攻転出」にするか二つの進路について考え始めた。特に、大学院の進学において、学んできた「日本語の基本的なスキル」が「一部欠如」していると感じ、改善のために「言語能力の改善策を取り入れ」、聞き取りや会話の練習に多くの時間を費やした。しかし、その一方で、「専攻カリキュラムの固定化」のため必修科目とされていた英語に取り組んでも、高校時代の英語力の不足が影響して「英語力の向上にいたらず」、最終的には「専攻転出」を決めた。</p>
理論記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「英語成績不振による日本語の選択」により、「大学入試に向けた日本語学習」に集中し、英語力が大いに不足している。</li> <li>● 大学専攻の選択肢が限られ、「やむを得ず日本語専攻選択の決定」をする。</li> <li>● 「日本語の基本的なスキル」の「一部欠如」に対して、「言語能力の改善策を取り入れ」る。</li> <li>● 努力にも関わらず「英語力の向上にいたらず」、「専攻転出」を決める。</li> </ul>

以下では、劉強さんの語った内容の詳細を、考察を加えながら記述していく。

「英語成績不振による日本語の選択」により、「大学入試に向けた日本語学習」に集中し、英語力が大幅に遅れている。

劉強さん：我高中的时候一点英语都没有学习，因为我在初中时英语不好，才能考四五十分，高中选择学习日语能让我的外语分数提高，我是为了以后的高考才学习日语的。（高校のとき、私は英語をまったく勉強していませんでした。中学のときに英語が苦手で、テストでもいつも40～50点くらいしか取れなかったからです。外国語の点数を上げるために日本語を選びました。将来の大学入試（高考）を見据えて、日本語を勉強することにしました。）

劉強さんは、高校での外国語科目として英語ではなく日本語を選択した背景には、中学時代に英語が苦手で成績が振るわなかったという経験があり、大学入試における得点向上を目的とした現実的な判断があったことがうかがえる。このことから、話し手は進路に関して実利的な視点を

重視し、自身の得意・不得意を冷静に見極めたうえで戦略的に科目を選択する傾向があると考えられる。また、学習選択の動機が明確である一方で、語学そのものへの強い興味よりも、進学という目標達成の手段として語学を捉えていた可能性も示唆される。

#### 大学専攻の選択肢が限られ、「やむを得ず日本語専攻選択の決定」をする。

劉強さん：没有特别想学日语专业，因为高中学的日语，填报志愿时受限，有一些专业没得选。（特に日本語専攻を強く希望していたわけではありません。高校で日本語を勉強していたため、志望専攻を選ぶ際に制限があって、受けられない専攻もありました。）

劉強さんは特に日本語専攻を強く希望していたわけではなく、高校で日本語を学んでいたことから、志望校や専攻選択に一定の制約があったことがうかがえる。このため、専攻選択は本人の強い意志や興味というよりは、学習経験や入試制度の制限によって影響を受けた側面が大きいと考えられる。したがって、話し手の専攻決定は、必ずしも主体的な選択ではなく、環境要因や制度的条件に左右された消極的なものであった可能性が示唆される。

#### 「日本語の基本的なスキル」の「一部欠如」に対して、「言語能力の改善策を取り入れ」る。

劉強さん：主要是讲课文，讲语法，单词然后是做题，听力训练很少，课本上有听力，就会听一听，考试试卷上有听力的话，也会听。但是，到了高三为了高考，基本上每天都会听。语言的应用完全没有。（高校での日本語の授業は、主に教科書の本文の解説や文法、単語の説明、それに関連する問題演習が中心でした。リスニングの練習はほとんど行われず、教科書に音声が付いている場合や、試験にリスニング問題がある場合に限って音声を聞く程度でした。ただし、高校三年生になってからは大学入試に向けて、ほぼ毎日リスニングの練習をするようになりました。とはいえ、実際に日本語を使って話したり書いたりするような応用的な活動は全くと言っていいほどありませんでした。）

この発話内容からは、劉強さんが高校時代に受けた日本語教育が受験対策に偏っており、実際の言語運用能力を養う機会が不足していたことが明らかである。これにより、話し手は自身の日本語力に不安を抱き、専攻学習への意欲や成果にも影響を及ぼした可能性が高い。さらに、この事例は、高校外国語教育が受験に特化しすぎることで、実践的な言語能力育成が十分に行われていないという構造的な課題を示しているといえる。

劉強さん：我听力很差，我把很多精力放在听力和会话上，现在主要是晚上会听一些听力，睡觉之前会听一点日语会话，然后看一些日语电影或者动漫，晚上跑步的时候听一些日语歌，训练耳感和语感。感觉有一定的效果。（リスニングと会話がとても苦手なので、たくさんの時間をそちらに集中しています。今は主に夜にリスニングをしたり、寝る前に少しでも日常会話を聞いたりしています。また、日本語の映画やアニメを見たり、夜のランニングの時に日本語の歌を聴いて、耳と感覚を鍛えています。少しずつ効果を感じています。）

以上の発話内容からは、劉強さんが自身の聴解力の弱さを認識した上で、それを克服しようとして、日常生活の中にリスニングや会話練習の機会を積極的に組み込んでいる様子がうかがえる。特に、夜のリスニングや寝る前の会話音源の活用、アニメ・映画の視聴、ランニング中の音楽視聴といった工夫は、耳の感覚や語感の向上を意識したものであり、自主的かつ継続的な学習姿勢が見て取れる。こうした努力により、話し手は少しずつ効果を感じ始めており、言語能力の改善に向けた前向きな取り組みが着実に進んでいることがわかる。

### 努力にも関わらず「英語力の向上にいたらず」、「専攻転出」を決める。

劉強さん：如果继续学习日语就一定学英语，大一和大二的英语公共课还得学，英语对我来说基本上是一点都不会，我应付不了。我也努力学了一个学期，但是还是不行。没办法，只能转专业。（日本語の勉強を続けるとなると、英語も必修で学ばなければならず、大学二年まで英語の授業は履修しないとイケない。でも、英語は私にとって全くできなくて、正直、対応できませんでした。1学期間しっかり勉強しようと努力しましたが、それでも無理でした。仕方なく、専攻を変えるしかありませんでした。）

この発話からは、劉強さんが日本語を学び続ける中で、英語の履修を避けられず、その学習に大きな困難を感じていたことがわかる。英語を「全くできない」と述べている点から、基礎的な理解や運用にも不安があり、必修科目としての英語が強い負担になっていたと考えられる。一学期間努力しても成果が出なかったのは、本人の能力の問題というより、学習背景や個人差の影響が大きかったとみられる。その結果、「専攻転出」を選ばざるを得なかったことは、個人の適性と大学のカリキュラムの間にずれがあった事例といえる。

## 6. 結論と今後の課題

前章で、協力者4名のそれぞれが「専攻転出」に至った経緯についてまとめた。最後に、彼らの「専攻転出」意識の形成プロセス総合的に考察し、そこから導き出された課題について述べる。

専攻選択時の「曖昧さ」は、学生の「専攻転出」の動機の一つとして作用している。これは、沈・陈（2003）、陈・朱（2005）、黄伟达（2005）、刘・肖（2006）、刘桂琪（2008）、陈・李・张（2009）、李（2009）、刘娟（2010）、张・王（2017）、黄俊利（2018）、罗・张・李（2023）が論じる、入学前の専攻選択時における圧倒的な情報不足が「専攻転出」の潜在的な要因であるという観点に一致している。専攻で学ぶ際に求められる能力や条件、カリキュラムの内容、教育の質や学術レベルなどに関する十分な情報が得られていないといった圧倒的な情報不足の状況が「曖昧さ」として指摘されている（沈・陈，2003；陈・朱，2005）。さらに、「曖昧さ」は単に専攻に関する情報不足にとどまらず、学生自身が自らの能力、特技、興味などを認識できていないことも含まれる（李，2009；罗・张・李，2023）。協力者の「日本語に関することは全然知りませんでした」「外国語の勉強がすごく好きってわけでもなくて、正直あまりよく分かっていません」「その大学に入れるなら、専攻はなんでもいい」「大学二年まで英語の授業は履修しないとイケない」といった発言から専攻に関する情報の不足や興味を考慮せずに専攻を選択したことが明らかとなった。

このように、専攻選択時の「曖昧さ」は、専攻に関する情報不足だけでなく、学生自身の興味や能力の未把握にも起因しており、それが結果的に「専攻内容への関心の欠如」や、在学中の「学習能力の欠如」、「専攻への満足度や適応度の低下」へとつながっていると考えられる。

また、「専攻内容への関心の欠如」は、学生の「専攻転出」動機の形成に影響を与えている。先行研究によると、大学入試の成績が思わしくなかったため、専攻内容に関心がなくとも低得点で入学可能な専攻を選択した場合、入学後に転出の必要をより強く感じるがあると指摘している（胡，2004；劉・熊，2008；王有才，2011；張・王2017）。「大学に進学できればいい」「たとえあまり得意ではなく、興味のない専攻であっても、公立大学で学費が安ければそれでよい」「その大学に入れるなら、専攻はなんでもいい」といった発言からも分かるように、協力者は「自身の興味を確認できていない」という「曖昧さ」と、「成績不振」による進学への不安とが相まって、大学への合格可否のみに関心を向け、専攻内容に対する関心や理解を欠いている傾向が見られた。入学後、専攻内容と自身の関心・適性との乖離により違和感や不適応を感じやすく、それが「専攻転出」の意識につながる可能性が高い。

最後に、本稿のデータから、新たな「専攻転出」の理由として、「受験科目による専攻選択範囲の制限」が学生の「専攻転出」の動機を誘発していることが明らかになった。これは受験科目によって選択できる専攻が限定されることで、学生は本来の興味や適性に合わない専攻を選ばざるを得なかった。その結果、専攻との不一致を感じ、「専攻内容への関心の欠如/喪失」に陥り、「専攻転出」を検討した。

在学中、「学習能力の欠如」は学生の「専攻転出」意識の形成を強化している。李（2009）は学習能力や興味と専攻から求められる能力が一致しない場合、十分な学習効果が得られず、学習の自主性や能動性が学習のプレッシャーによって失われることで、「専攻転出」の可能性が高まると主張している。協力者の「先生の言葉を聞いた後、確かに頑張ろうという気持ちはありましたが、結局は二日も続かず、ほとんどが三日坊主で終わってしまいました。結果を得る前に、途中であきらめてしまい」「『基礎日本語』もかなり抜けていると感じていて、単語帳を見たり単語を覚えたり、ネットで文法の勉強動画を探して補おうとしたんですが、結局うまくいかなくて、あまり効果が出ませんでした。もう自信をなくしています。」「英語は私にとって全くできなくて、正直、対応できませんでした。1学期間しっかり勉強しようと努力しましたが、それでも無理でした。仕方なく、専攻を変えるしかありませんでした。」といった発言から、彼らは専攻学習に対して一定の努力を注いだものの、学習能力の限界により期待した成果を得ることができず、その結果、学習へのプレッシャーを感じるようになったことが見て取れる。このようなプレッシャーは、学生の学習意欲や自信に悪影響を及ぼし、「専攻転出」の意識をさらに強めた。

学生の「同調心理の影響」は、「専攻転出」意識の形成を促進させた。劉桂琪（2008）は、「専攻転出」に対する明確な動機なしに、先輩からの影響を受けて転出した学生も存在することを指摘している。協力者の「彼女の影響はかなり大きく、彼女が「専攻転出」を考えているので、私も試しに専攻を転出してみようと思いました。もし彼女の影響がなければ、私も転出しなかった可能性が高いです。」といった言葉から、「専攻転出」に対する強い動機がなくても、周囲の人間、特に身近な存在の影響によって転出の意識が芽生え、意思決定に至ることがあることが明らかになった。こうした同調的な行動は、転出の是非を自ら十分に検討しないまま意思決定に至る可能

性をはらんでおり、その背景には学生間の人間関係や情報の共有が大きな役割を果たしていると考えられる。

ここまで記述した4名の「専攻転出」者は、専攻選択時において「曖昧な選択」「専攻内容への関心の欠如・喪失」「受験科目による選択範囲の制限」といった消極的要因を抱えていた。在籍中においては、「学習能力の欠如」や「同調心理の影響」といった2つの消極的要因が見られた。本稿のデータから読み取れる限りでは、「専攻転出」意識の形成には、これらの要因が単独で作用したのではなく、複数の消極的要因が重なり合って影響し合い、「専攻転出」に至るプロセスを形成していると考えられる。

本稿の調査データに基づき、「専攻転出」の要因として、河北省の日本語専攻に関する課題は主に3つあげられた。

1) 学生に対する進学志望指導の不足：学生は専攻を選択する際に、専攻内容、カリキュラムの内容、就職の見通しなどについて十分な情報を得ていないという「曖昧さ」に直面している。このような「曖昧さ」は、学生が自身の興味や能力に基づいて適切な判断を下すことができなくなり、入学後に興味を失い、適応に困難を感じる原因となっている。学生は自身の興味や能力を理解しないまま専攻を選択する傾向がある。

2) 大学の選抜制度の単一性：大学は主に大学入試の成績のみを基準として学生を選抜しており、「成績不振」、「受験科目」による制限のため、学生は個人の興味やキャリアプランを優先させることができず、受動的に専攻を選ばざるを得ない状況にある。このような制度は、学生の個性や将来的な可能性を十分に考慮していない。

3) 専攻カリキュラムと学生の学習能力との不一致：学生は学習意欲を持っていても、自身の能力と専攻の要求にギャップがあるため、最終的に学習目標を達成することが難しくなっている。このことは、学習へのプレッシャーを強めるだけでなく、学生の学習意欲や自信をも削ぐ要因となっている。

これらの問題に対して、次のような対策が考えられる。まず、高校のみならず大学も進学指導体系の構築に積極的に関与し、専攻の教育内容、カリキュラム構成、卒業後の進路・就職状況などに関する情報を、パンフレットやウェブサイト等を通じて分かりやすく提供する必要があると考えられる。また、現在の入試制度が単一の成績基準に依存している点については見直しが求められており、総合的な評価や多角的な選抜方法の導入が提案されている。これにより、大学の学生の興味や個性、潜在能力を考慮した選抜が可能となり、専攻選択の柔軟性と多様性が確保されると期待されている。さらに、専攻教育課程の最適化として、理論と実践を融合させた教育内容の整備や、学生の主体的な学びを促すカリキュラムの開発も重要な課題とされている。これらの取り組みは、学生の専攻選択の適切性を高め、学習に対する満足度や適応力の向上につながる可能性がある。

本研究は、中国河北省の大学における日本語専攻の学生4名を対象とした質的調査であり、事例数および地域的範囲において一定の制約が存在する。そのため、本研究で得られた結果を他地域や他専攻にそのまま当てはめることは困難であり、全国的な傾向として一般化するには慎重な

姿勢が求められる。

また、本研究はインタビューを中心とした少人数の事例に基づく質的研究であるため、対象者の経験や背景を深く掘り下げることに関して一定の強みがある一方、その結果の普遍性や再現性には限界があることも否定できない。

今回得られた結果の中には、中国の大学入学制度や日本語学習者に対する社会的価値づけといった、調査対象者が置かれた文脈に固有の要因が含まれていた。たとえば、最多の場合には96もの志望専攻を記入可能であるという制度は、中国の高等教育機関に特有の仕組みであり、その中で専攻選択や転出がなされている点は、本研究が描き出した「専攻転出」プロセスの重要な一部となっている。

このように、本研究の知見は、中国の高等教育機関における日本語専攻者の転出過程を示すうえで、地域的・制度的背景に根差した固有性を有している。この固有性を踏まえた上で、どの程度の一般化が可能であるかを検討するためには、今後、異なる地域や多様な専攻を対象とした調査や、より多くの対象者を含む量的調査の実施が求められよう。

そうした取り組みによって、河北省における特定事例の理解にとどまらず、中国全体における高等教育機関の「専攻転出」に関する構造的・一般的傾向の解明が可能になると考えられる。今後の課題としたい。

## 「参考文献」

### 日本語文献（アルファベット順）

- 大谷尚, (2007), 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案: 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2), 27-44.
- 大谷尚, (2019), 『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会.
- 楊嵐, (2006), 「中国の高等教育改革における教養教育の変容—市場化への対応に焦点を当てて」『教育学論集』, 2: 123-142

### 中国語文献（アルファベット順）

- 本书编委会, (2024), 『全国普通高校本科教育教学质量发展报告(2022-2023年度)』, 高等教育出版社, 174.
- 蔡爱萍・周楠, (2020), 「大学生转专业的意愿及其影响因素探究」『中国多媒体与网络教学学报』, 1: 24-26.
- 陈剑波・朱良, (2005), 「透视高校转专业现象 构建良好的转专业体制」『绍兴文理学院学报』, 11: 14-16.
- 陈曦・李金林・张伦, (2009), 「本科专业选择动因分析」『北京理工大学学报』, 11: 111-114.
- 胡丽伟, (2004), 「高校转专业现象的几点思考」『浙

江中医学院学报』, 6: 67.

- 黄俊利, (2018), 「大学生转专业现状及原因研究—以N校为例」硕士论文 南京师范大学.
- 黄伟达, (2005), 「我国高校本科生转专业动因调查研究」『高教发展与评估』, 2: 58-60.
- 李爱国, (2009), 「大学生转专业的现状分析与思考」『中国成人教育』, 23: 35-36.
- 刘桂琪, (2008), 「高校本科生转专业若干问题的思考」『科技资讯』, 33: 198-200.
- 刘慧娟・肖珍教, (2006), 「当前高校本科新生转专业的意向调查与分析」『中国高教研究』, 6: 34-35.
- 刘娟, (2010), 「我国高校本科生转专业现状及对策研究—浙江师范大学为例」硕士论文 浙江师范大学.
- 刘雄・熊辉, (2008), 「对当代高校大学生转专业的思考」『中华文化论坛』, 8: 23-24.
- 罗晨恺・张彤宇・李成云, (2023), 「本科生转专业现状的调查与分析」『卫生职业教育』, 10: 22-24.
- 沈银花・陈毅广, (2003), 「对大学生转专业的“另类”思考」『煤炭高等教育』, 5: 89-91.
- 苏强・张东・周建民・林征, (2016), 「本科生转专业问题的调查分析」『高等工程教育研究』, 1: 97-102.
- 孙士宏, (2005), 「大学生转专业问题初探」『大学教育科学』, 6: 86-88.
- 王娟, (2019), 「我国高校转专业体系构建的有效路

- 径探索』『宿州教育学院学报』, 2: 68-70.
- 王有才, (2011), 「对大学转专业问题的分析与思考」『科技信息』, 35: 380.
- 王月红, (2012), 「本科生转专业问题研究」硕士论文 东北师范大学.
- 吴海练, (2010), 「对大学生转专业的“另类”思考」『科教文汇』, 21: 34-35.
- 张柳青・王增强, (2017), 「关于高校大学生转专业问题的思考」『林区教学』, 1: 116-117.
- 钟颖, (2017), 「大学生本科生转专业制度研究」硕士论文 武汉理工大学.
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室, (2014), 『现代汉语词典』, 商务印书馆, 873.

### 英語文献 (アルファベット順)

- Ibarra-Salazar, J. (2008, November). *Determinants of major switch during college*. Paper presented at the 78th Annual Meeting of the Southern Economic Association, SMU Seminar Series.
- Moon, M., Jung, W., & Shin, Y. (2013). A phenomenological approach to university major changing influenced by extracurricular club participation. *The Korean Journal of Dance*, 71 (1), 93-110.
- Stanek, S. (2005, July 31). Want to change your major. *Chicago Tribune*, 1.

### 【注】

- <sup>1</sup> 3.07%という数値は、本稿筆者が、中国河北省の4つの大学が設置している日本語学科に問い合わせ、回答を得た入学者・転出者の数字から算出した。
- <sup>2</sup> 本稿において「消極的」とは、専攻選択または転出に際して、主体的な目的意識や強い関心を欠き、外的かつ受動的な要因に基づいて意思決定を行った場合を指す。具体的には、専攻選択時においては、進学や専攻選択の動機が不明確で、他者からの助言・他者による干渉や成績条件などによって選択がなされる場合、また専攻転出時においては、学習困難や就職不安、周囲の影響などにより専攻への意欲を喪失し転出を

志向する場合が該当する。これらに共通するのは、動機が内発的ではなく外的要因に依存するという点である。なおかつ、このような場合、往々にして、将来や専門分野への明確なビジョンや積極的関与が欠如するという点にもなる。一方で、たとえ転出の契機に就職不安があったとしても、転出先の専攻に対して明確な志向性を持ち、その将来性や学問的特徴について一定の理解を有したうえで選択された場合は、「消極的」とはみなさない。

- <sup>3</sup> 中华人民共和国教育部, [http://www.moe.gov.cn/jyb\\_sjzl/moe\\_164/201002/t20100220\\_3421.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/moe_164/201002/t20100220_3421.html), 2025年2月11日最終アクセス。
- <sup>4</sup> 中华人民共和国教育部, [http://www.moe.gov.cn/srcsite/A08/s7056/199804/t19980410\\_162625.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A08/s7056/199804/t19980410_162625.html), 2025年3月7日最終アクセス。
- <sup>5</sup> 中华人民共和国中央人民政府, [https://www.gov.cn/zhengce/2019-07/08/content\\_5407361.htm](https://www.gov.cn/zhengce/2019-07/08/content_5407361.htm), 2025年3月7日最終アクセス。
- <sup>6</sup> 山西省静乐县教育体育局, <https://sxjlxjcyw.30edu.com.cn/Article/a953fa00-5858-4286-8680-8de051e8091f.shtml>, 2025年3月7日最終アクセス。  
中国の政策文書の一部は教育部公式サイトに恒常的に保存されず、地方教育局や報道機関のサイトを通じて流通する可能性がある。そのため、本稿では山西省静乐县教育体育局ウェブサイトに掲載された資料を参照した。
- <sup>7</sup> 中华人民共和国教育部, [http://www.moe.gov.cn/srcsite/A02/s5911/moe\\_621/200503/t20050325\\_81846.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A02/s5911/moe_621/200503/t20050325_81846.html), 2025年3月7日最終アクセス。
- <sup>8</sup> 中华人民共和国教育部, [http://www.moe.gov.cn/srcsite/A02/s5911/moe\\_621/201511/t20151119\\_220038.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A02/s5911/moe_621/201511/t20151119_220038.html), 2025年2月11日最終アクセス。
- <sup>9</sup> 「専攻転出」者が実際に転出にいたるまでの間には、通常複数の要因が重なっている。それらの要因は消極的なものばかり、あるいは積極的なものばかりというわけではなく、両者が並立しているという場合もあり得る。本稿では、総合的に見て、学生本人にとって、消極的要素のほうが積極的要素より、重要な意味を持っていたと判断されるとき、消極的要素での専攻選択・「専攻転出」者と捉え、研究対象とした。